平成10年12月18日第三種郵便物認可　平成11年8月1日発行
Vol.25, No.2, 通巻142号　年4回（2.5.8.11月の1日）発行

INTERDISCIPLINARY JOURNAL ON WORLD PEACE AND EDUCATION

世界平和研究

1999　夏季号　通巻142号

●巻頭言 …… 一松信　1

●特集1：高等教育と家庭

21世紀のリーダー育成と教育改革の展望（下） …… 西澤潤一　2

教育と家庭をどう再建するか—米国からの提言— …… P.F.フェイガン　11

道徳教育教材の課題とその在り方 …… 杉原誠四郎　30

●特集2：アジアとの共生の道を探る

日韓の共生関係をどう築くか …… 金両基　39

21世紀・日本の生きる道—国際から地域際へ— …… 河部利夫　50

北朝鮮問題と日本の戦略 …… 近藤三千男　57

●海外の動向

韓国：家庭と高等教育—ソンムン大学の挑戦— …… 李京埈　65

●国際報文

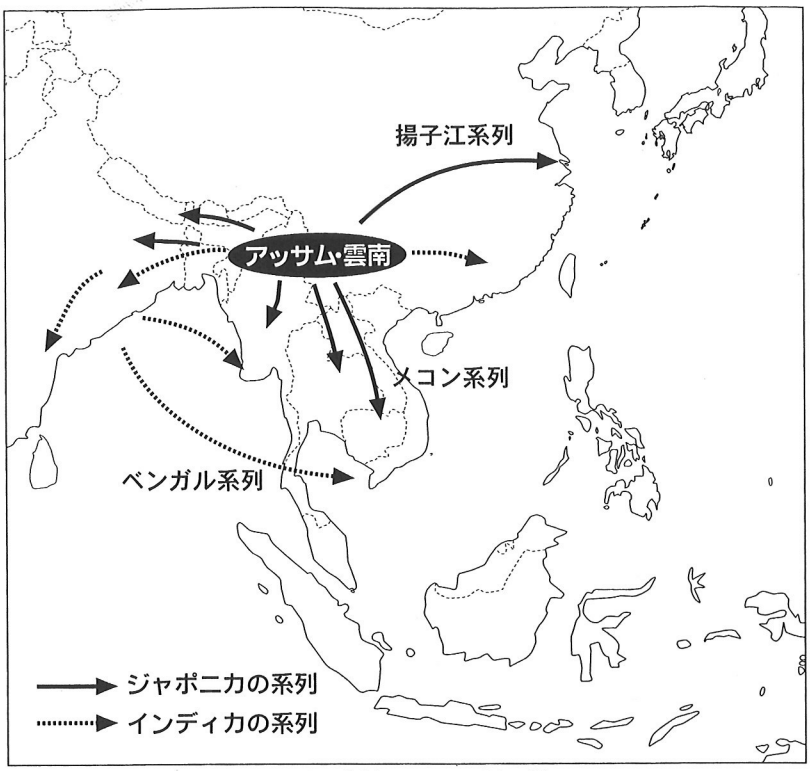
True Family Role in the High-Tech Society …… Takahiko Haseyama　68

Evolving Women-Centered Paradigms for the Next Millennium …… Amelou Reyes　82

●本部・地方活動

本部／北海道支局／中部支部／福岡支局 …… 90

世界平和教授アカデミー
THE PROFESSORS WORLD PEACE ACADEMY OF JAPAN



アジア大陸における稲の道
（渡辺忠世『稲の道』NHKブックス、昭和52年）

支配するようになった。

③中国古典文化

また、「中国古典文化」（漢字、儒教、仏教）というものも、共通性としてあげることができる。

「日本には何かオリジナルなものはないのか」と、よく留学生に聞かれるが、それに対して私は、「ない」と答えている。日本には、中国や朝鮮半島を通ってほとんどの文物がやってきた。しかし日本はもらったものをいつも発展させて、自家薬籠中のものにして、もっとよいものにしてしまう。他人の文化を入れても発展させる。日本文化は外来文化を取り入れて、それらを創造的に発展させてきたが、そこにこそ日本のよさがあるのではないかと思う。

中国古典文化は、朝鮮半島を経由して大半日本に来ているが、この事実を認めたがらない人が日本にはけっこういる。そして彼らは、「中国から直接文化が日本に来た」と主張する。陶芸、仏教、漢字など見ても、殆ど朝鮮半島経由であることは明確である。

（2）「つくる」共通性

それでは共通するものがない場合は、どうするのか。その場合は、相手がもっているものと、自分がもっているものとを、掛け合わせながら第三の文化をつくるのが創造である。

好例を挙げると、明治7年に銀座の木村屋がアンパンを作った。あんこは、アジア文化。一方パンはヨーロッパ文化。パンであんこを包んでアンパン。その第一号作品を、明治天皇にさし上げ、天皇が非常においしいと言われ、それを機に広がったと言われる。今やアンパンは、パリやニューヨーク、ロンドン、ドイツなど各地で、ひとつの文化として広がっている。

このように第三の文化を創ることを「文化融合」（アッカルチュレーション、Acculturation）と言っている。こうした形で国際におけるコミュニケーションができるようになる。

東北アジア地域において、「つくる」共通性として何が考えられるであろうか。

①「東北アジアフォーラム・センター」の設立

東北6カ国の青年たちによる、集合の自由談論の場をつくり、相互理解を進める。将来は、地域開発の大学つくりを構想したいところである。

②「東北アジア友情鉄道」の開発

私がかねがね考えていることの一つに、東北アジア地域に鉄道網を整備してはどうかということがある。すなわち、「東北アジア友情鉄道」を作るという提案である。新たに線路などを新設する必要はない。既にあるものを活用すればよく、それ

を整備すればよい。そして、特に関心をよせているのは「日韓トンネル」の建設である。このことをある年の「東北アジア経済協力協会」の会議で話したことがあったが、「それは夢みたいな話だ」と言われた。「しかし、数年前に英仏海峡に鉄道が開通したではないか」と反論した。青函トンネルも、素晴らしい日本の技術力の産物である。

これは国際的公共事業になる。この列車ができると、「東京発ロンドン行」や、「東京発バルセロナ行」列車が可能となる。日韓トンネルの費用は約20兆円と言われているが、日本では銀行の再建に何十兆円も投入していることを考えれば、十分可能な投資額と言える。こうした企画は、まさに南北分断情勢を打破し、平和共存の時代を作る生産的課題と言えるのではなかろうか。

かつて西独と東独が対立していた時代に、西ドイツから東の西ベルリンに行く時、鉄道はずっと続いていた。東西ドイツは、紳士協約を結んでそうしていた。戦争をやっていても、この鉄道だけは守ろうと言う考えを持っていた。これこそ素晴らしい叡智といえる。このような考えをどうしてアジア人は、もてないのか。鉄道だけは、戦争などの非常事態があっても手をつけないと言う紳士協約がどうしてできないのか。

このような広い心をもって取り組み、共同体の形成に向けて一歩ずつ進めていくことを願っている。

（本稿は平成11年4月17日、名古屋市における第16回アカデミーフォーラムの講演の速記録に加筆訂正したものである）

【参考文献】

＜著書＞

河部利夫,『外国学ことはじめ』. 玉川大学出版部, 1979年.

渡辺忠世,『稲の道』. NHKブックス, 昭和52年.

江上波夫,『騎馬民族』. 中公新書, 1957年.

河部利夫,『歴史の転換を生きて—この五十年—』. 玉川大学出版部, 1995年.

＜論稿＞

河部利夫,「国際的相互理解への道」—共同体を考えるために—, 第1, 2回,「東北亜経済共同体可能性模索」国際会議、東北亜経済文化交流センター, Seoul, Korea, 1989年11月.

河部利夫,「東北アジア友情鉄道の開発」—「東北亜経済圏」形成要因として, 東北亜経済協力民間協会、第4回国際会議・「東北亜経済協力シンポジウム」, Seoul, Korea, 1993年8月.

河部利夫,「日本の新しい活路は、図北から」（シンポジウム21世紀・日本の進路と青少年教育）, 圓一, 1995年10月号.

河部利夫,「環日本海共同体の形成を」—図南から図北へ. 世界日報, 1996年12月8日号.